

加藤先生には尺八があった

根 間 弘 海

経営学部教授

加藤克己先生が定年退職になります。送別の辞を執筆するよう論集編集長の倉持先生から依頼がありましたが、多分、次のような理由によるだろうと思い、快く引き受けました。

- (1) 経営学部で外国語の授業を共に担当していること。先生はドイツ語、私は英語担当です。
- (2) 教授会でほとんど常に隣席に座り、なにやら親しそうにおしゃべりしていること。
- (3) コンピューターを駆使した外国語教授の論文を二篇共同執筆していること。
- (4) LL室長を共に1期ずつ務め、同じような経験を共有していること。
- (5) 学内食堂でときどきランチを一緒にし、外国語教育のあり方を論じて合っていること。
- (6) 加藤先生の研究室でときどきコンピューター操作を教えてもらいながら、学生たちと語り合っていること。
- (7) 普段、接する機会が多く、学内のことだけでなく、個人的なことまで詳しく知っているらしいこと。

加藤先生とは専門が違いますが、外国語教育担当であることや年齢がかなり近いことなどもあって、親しくさせていただきました。しかし、不思議なことに、学外で一緒に行動を共にしたことがありません。したがって、向ヶ丘遊園駅近くで一緒に飲んだこともありませんし、学外の会合などで一緒になったこともありません。

加藤先生はドイツ語教育の担当なので、学内ではドイツ語の先生だと見られていますが、実は、あまり知られていない側面があります。これは、同じ経営学部にも長い間勤務していても知らない先生もいるかもしれません。おそらく、勤務して10年足らずの先生なら、まったく知らない側面であろう。加藤先生の言葉を借りながら、この際、それを少し紹介したいと思います。

加藤先生の隠れた専門は近世邦楽の理論とその歴史の研究で、それに加えて尺八の演奏です。大学院の学生だった頃、それまで耳にしたことのない心の奥底に響く神秘的音色に引き寄せられたそうです。校舎の中をその音源に鳥肌立つ思いで近づいてみると、それが尺八だったのです。尺八との出会いは偶然でしたが、そのとりこになってしまい、先生の人生も変わってしまいました。尺八のおかげで、素晴らしい経験をするようになります。

大学院を卒業後、専修大学の教員となり、初めての給与を手にし、最初買った物も、実は、尺八です。すごく高価なもので、練習用として購入しましたが、1ヶ月分の給料と同額でした。のめり込むように尺八の師匠に師事を受け、順調に準師範、師範、大師範という位をきわめました。

大師範の位は1970年ごろに授与されました。その後、所属していた流派の都山流宗家に内紛があって、加藤先生はその流派から離れました。内紛は先生のあずかり知らぬ問題であり、それに巻き込まれるのが嫌だったようです。

尺八を習い始めてからしばらくし、腕に自信が湧いてきたとき、海外で尺八を伝えたいと思い始めました。それがいよいよ1990年代に実現します。最初は外務省国際交流基金の支援で、ヨーロッパ公演旅行でした。それは、薩摩琵琶の普門義則氏とのジョイントでした。訪問したところは、次の3つです。

- (1) ハンガリーのブダペストではリスト音楽院。

- (2) オーストリアのウィーン大学。
- (3) ドイツのマールブルク大学とケルン大学。

マールブルク大学での演奏は加藤先生の留学のお礼を兼ねていましたが、その大学ではアルテアウラという宗教論争で有名な歴史的ホールで演奏しました。どの会場でも演奏は大盛会で、公演は大成功でした。

演奏後、フランス人、オランダ人、もちろんドイツ人聴衆からの鋭い質問に感激したと当時を思い出しながら、加藤先生は語っています。質問の中に忘れられないものがあるそうです。それはブタベストでマジヤール放送局のインタビューを受け、このやり取りが放送されたことです。日本の音楽家の楽器との一体性と西洋音楽の演奏家の解釈との相違について議論がありましたが、それが話題として取り上げられました。

ヨーロッパ音楽公演旅行は1990年に続いて、1993にもありました。第3回目としてパリとベルリンへの招待もありましたが、国際交流基金に予算がなく、これは実現しませんでした。ザールラント大学では2回にわたって日本の民俗学、特に木地師のことについて木地師作成の品物を見せながら話しました。客員教授としての招請もすべて、音楽公演旅行がきっかけになっています。

ウィーン大学では比較音楽専攻のフェーダーマイヤ教授から数年間の客員教授の席を提供されましたが、これは専修大学側が許可せず、実現しませんでした。客員教授職の提供はザールラント大学からもありましたが、これも国内・在外研究制度の絡みで出かけられず、残念な思いをしています。ウィーン大学客員教授という名前が入試案内なんかに載れば、大学の宣伝にもなるはずですが、当時の職務規定の関係で許可が出なかったようです。加藤先生は今でも、このような海外の大学の客員教授の提供を何回か拒否されことを残念に思っています。先生が泣きの涙を呑まざるを得なかった苦い経験を幾度となく語ったことを私も懐かしく思い出しています。

加藤先生はドイツ文学が専門分野ですが、尺八という趣味が高じて海外

公演でも活躍してきました。専修大学ではドイツ語教員であるため、その科目の担当者としての顔しか強調されてきませんでした。まったく別の顔があり、しかも優れた演奏家でもあったのです。ドイツ語教員としては優秀な学生を何人も育て、ドイツの大学にも留学させています。ドイツで学位をとった教え子も何人かいます。国内では北は北海道から南は九州まで活躍している教え子がたくさんいて、今でも交流が続いているとのこと。確かに、加藤先生は学生の面倒見がよいらしく、研究室にはいつも学生が何人かいました。特に女子学生に慕われていたようで、先生もその雰囲気を大に楽しんでいました。

最近では、退職後の生活プランで頭が一杯らしく、いろいろな夢を語っていました。教授会で隣り合って座ることが多かったので、どうしてもその話になってしまいました。そのいくつかをここで紹介したいと思います。

- (1) 長い間の趣味だった尺八は公演などのためではなく、趣味として継続するそうです。尺八は年取っても楽しめるので、気力と体力が続く限り、大丈夫らしいです。
- (2) 近い将来、特に近世邦楽の巨星八橋検校の功績を検証したいという野望を抱いています。長編小説という形で、この検校の偉大さを書き記すとのこと。この話はときどき聞きましたが、もうかなり書き下ろしてあるようなので、実現の可能性は大です。
- (3) 確か3、4年前に、健康維持のためにゴルフを始めましたが、今後も歳相応に楽しむそうです。ゴルフ仲間が何人かいると聞いています。
- (4) 退職金が手に入ったらパワーショベルを購入し、身体をいたわりながら晴耕雨読の生活をしたいそうです。贅沢さえしなければ、お金に困って餓死することはないとのこと。

若いときと違って、10年後や20年後の人生を語るのは難しいとのことでした。でも、退職後4、5年のことなら、生活設計ができます。上に述べ

たことは、どちらかといえば、近い将来できそうなことばかりです。たぶん、すべて達成するでしょう。問題は、これらをすべて達成したら、その後をどうするかです。これについては、私も加藤先生に具体的に尋ねたことはありません。

最後に、月並みの言葉ですが、これまで専修大学のためにご尽力してくださったことに感謝します。個人的には、この20年間、親しく接していただいたことに心から有難く思っています。これからはもっとお体をいたわり、肉体的にも精神的にも幸せな人生を送られますよう願っています。